かささぎ通信 第137号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2024年 6月 14日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2024年5月の「森三郎の作品を読む会」では、「フィルム」(『赤い鳥』1933年8月号)を読みました。

今回読んだ作品のタイトル「フィルム」とは文房具店の玩具のコーナーに売っていた「活動のフィルム」のことです。パラパラまんがと言った方が分かりやすいでしょう。尋常五年の主人公・三也は午後の図画の時間に使う画用紙を買いに校門前の文房具店に行きます。三也はその際に見つけた五銭のフィルムをパラパラやってみて面白いので、買おうかどうかと迷います。すると同級の正宗君が一円札を出して「おごつてやるうか」と言います。尋常五年の子が一円を持っているのは変だと思いつながら、つい「うん」と言ってしまった。

午後の授業の初めに、中川君の持っていた一円札が無くなったことを先生が告げます。中川君は学校の帰りに菓を買って来るように言いつかって一円札を持っていたのです。他人の物を盗むことがどんなに恐ろしいことか先生が話している間、三也はドキドキしてきます。作者森三郎は「足に力を入れてぬないとぶる／＼ふるえさうになります」(先生の)一言一言が頭に／＼／＼ひびきます。「顔の肉がひつつれるやうになつて来ます」と具体的な描写で、三也の不安感を表現しています。さつき文房具店での出来事を自分から先生に言おうかと迷っている時、当の正宗君が「わあつ」と泣き出します。暗い気持ちで家に帰った三也は夜も眠られなかったことでしょう。翌日もそのことが頭から離れません。恐らく正宗君は先生に懇々と諭され、昨日のことを反省し気持ちを切り替えるチャンスがあったのでしよう。しかし三也の方は、先生に自ら申し出ることも出来ず、正宗君は自分のことを先生に話したのだろうか、先生はなんと思っているのだろうか、堂々巡りの思いの中に沈んでいたと想像できます。

三也はそれきりフィルムを手にもしませんでした。六歳の弟が見つけ面白がって遊びます。ところが弟はフィルムをなくしてしまい、探してもなかなか見つかりませんでした。その弟は翌年急性腸カタルで亡く

なってしまう。その後、フィルムは大掃除の時に本箱の雑誌の間から出てきました。三也がフィルムを終わってからパラパラとやると、耳の横で弟の笑い声が聞こえるような気がしました。

当日の会は、読み終わってしばらくは静寂の中になりました。あの時フィルムの面白さに魅かれて、買おうか、いや無駄使いだと叱られるかと悩んだ一瞬の心の迷いに付け入るかのように、正宗君に「おごつてやるうか」「お金なら、僕持ってるんだから」「ほしいんだらう」と畳みかけるように言われ、思わず「うん」と言ってしまったことに始まる三也の後悔、その後の思いがけない展開にどう対処すべきか一人の心に抱える三也の焦燥と苦しみ、フィルムの後日談としての弟の急逝という話の構成を参加者それぞれ反芻するかのようでした。

やがてポツポツと感想が出て、「くよくよしても仕方ないけれどいつまでもそこに立ち戻ってしまう三也の苦しみを、弟の乾いた朗らかな笑い声が救っている、作者の心憎い解決」という声がありました。また子どもの成長期の大切な時に、人の物を盗むということの罪悪について説諭する先生の立場に立つての感想も出て、身につまされる思いでした。

「かささぎ通信」第133号で紹介した「パチンコ」(『赤い鳥』1993年5月号)も、知らない内に自分のカバンに同級生の無くなったパチンコが入っていたのに、正直にそれを言えなくなってしまった話でした。見たくもないパチンコをたんの後ろに投げ捨て、いずれ大掃除の時にほこりにまみれて出てくるなど想像する場面もありました。本当のことを言うことが難しいことや、言えなかった自分を責めることをテーマにした三郎作品(例「銀作」)は他にもいくつかありました。

問題のフィルムには、お婆さんの手籠の中から飛び出たリングが戻るように見える場面があり、不思議なリングを買った「おばあさん」(『赤い鳥』1932年5月号)との共通性があつて、興味深く思いました。

〈次回予定〉2024年7月12日(金)午後一時半〜三時半

「鳥勤左衛門奉公はじめ」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12)

「ひとりつ子」(『赤い鳥』1933.8)